様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ００４６０

研究課題名（和文）『説文繫傳』『篆韻譜』諸版対照データベースと大徐以前の小篆字形

研究課題名（英文）Database to compare "ShuowenJiezi Xizuan" and "Shuowen Jiezi Zhuan Yunpu"

研究代表者
鈴木　俊哉（suzuki, toshiya）

広島大学・情報メディア教育研究センター・助教

研究者番号：７０３１１５４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本課題の補助により、期間内に以下の成果物を公開できた。1)『説文解字篆韻譜』『説文解字繫傳』小篆対照表 2)『説文解字繫傳』諸本小篆対照表 3)『説文解字繫傳』汪啓淑本影印データ 4)『説文解字繫傳』小學彙函本影印データ 5)『説文解字繫傳』函海本影印データ　6) 汲古閣本説文解字通行本・四庫全書薈要本小篆対照表 7)『説文解字』岩崎本影印対比表 8)『説文解字』平津館本五松書屋版影印データ 9) 萬暦本『説文解字五音韻譜』・汲古閣本説文解字小篆対照表。このうち1) 2)が当初目標としていたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本課題の実施により、篆韻譜・小徐本の全数対応が第三者検証できる形で公開でき、それにより定量的に篆韻譜は大徐本成立以前の二徐の説文学の姿を残していると考えられることを示した。また、篆韻譜の字形を全て拾うことで、四庫全書本の小徐本の小篆字形が他のどの版本とも違うことについて一つの説明を提示することができた。また同時に、四庫全書本の内容が他本と違うことがすなわち書写の品質が低いからとは限らず、四庫学よりも広い範囲での書誌学研究の対象となりうる可能性を示した。
その他の成果としては、説文関係資料で参照されるものの影印出版が日本で流通していないもののデジタル画像を公開したことがある。

研究成果の概要（英文）：By this grant, following databases are produced and have been published: 1) Shuowen Jiezi Zhuan Yunpu - Shuowen Jiezi Xizhuan mapping table 2) Comparison table of Shuowen Jiezi Xizhuan representative glyphs 3) digital images of Shuowen Jiezi Wang Qishu edition 4) digital images of Shuowen Jiezi Zhuang Yunpu - Xiaoxue Huihan edition 5) digital images of Shuowen Jiezi Zhuang Yunpu - Hanhai edition 6) Comparison table of Shuowen Jiezi representative glyphs in Jiguge 5th edition and Siku Quanshu edition 7) Comparison table of Shuowen Jiezi representative glyphs of the multiple reprints of Iwasaki edition 8) digital images of Shuowen Jiezi Pingjinguan edition 9) Shuowen Jiezi Wuyin Pianhai - Shuowen Jiezi mapping table.

研究分野：人文情報学、文字符号化

キーワード：説文解字篆韻譜　説文韻譜校　小徐本

１．研究開始当初の背景

後漢の許慎が編んだ『説文解字』(以下、説文)は南北朝以降に正字政策の拠り所とされたが、現在我々が目にすることができるのは北宋初に徐鉉が校訂したいわゆる「大徐本説文解字」(以下、大徐本)である。しかし、南北朝～五代期の様々な字書・韻書が古文・籀文の字形を採集する資料の一つとして用いた説文は大徐本よりも前の版である。大徐本よりも前の篆書の様子を伝える資料としては木部残巻や口部断簡、あるいは(説文ではないが)篆隷万象名義が知られるが、説文全体に比べるとこれらの資料で知ることができる範囲はかなり狭い。

この問題に関して、時代は下るが、徐鉉の弟である徐鍇が編んだ『説文解字繫傳』(以下、小徐本または『繫傳』)は大徐本以前の説文の様子をある程度残す資料として重視される。しかし、現行の小徐本は北宋代に張次立が校訂を加えた結果、小篆字形も大徐本に従うよう改められたものである可能性を糸原敏章氏が指摘している。糸原氏は徐鍇の著作のうち張次立が校訂していない『説文解字篆韻譜』(以下、『篆韻譜』)に注目し、『篆韻譜』10 巻本(『篆韻譜』には景宋写本を翻刻した 10 巻本と、大徐本により増補を受けているとみられる 5 巻本の 2 系統がある)と『繫傳』の部首字 540 字を比較することで、この可能性を指摘したが、その後、調査範囲を拡大してこの指摘を検証するような研究は進んでいない。また、これに関わる問題として、『篆韻譜』と『繫傳』の文字集合の対応関係も、工藤早恵氏による統計的な総数での報告があるのみである。

２．研究の目的

『篆韻譜』の字形研究の大きな障害となっているのは、糸原氏が注目した『篆韻譜』10 巻本は切韻系韻書の構造をもってはいるものの、掲出順序が十分に規則化されていない古い構造であるため、単純に説文と(より規則的な排列をもつ)廣韻を突き合わせただけでは『篆韻譜』10 巻本での掲出位置が判らない問題にある。重要な先行研究には、たとえば上田正『切韻逸文の研究』があり、『篆韻譜』10 巻本と 5 巻本の対応表を作成しているものの、声類と等位によって順序を再構成した表であるため、そのまま利用して原本での掲出位置を探すことには難がある。もちろん、小篆字形は示されていない。

本課題では『篆韻譜』『繫傳』の諸本の小篆を対照できるデータベースを構築し、大徐以前の小徐本の小篆字形の議論の基盤を作ることを目的とする。

３．研究の方法

３．１．　事前準備

本課題の実施に先立ち、現代漢字あるいは構成部品群から説文小篆字形を検索し、大徐本本文へのハイパーリンクも提供する HTML5 ツールを作成した。また、川幡太一氏による段玉裁『説文解字注』データベースをもとに、大徐本・小徐本の諸本小篆対比表を作成した(課題開始時点では四部叢刊重印本(岩崎本)、藤花榭本、平津館本(光緒重刻本)、祁寯藻本のみ)。

３．２．　『篆韻譜』10 巻本・5 巻本対照表の作成

まず、『篆韻譜』5 巻本は説解に対応する楷書が示されているので、これをデジタルテキストとして入力した。次に、『篆韻譜』10 巻本と 5 巻本の小篆見出し字を全て切り出し、順序入れ替えをせずに単純に両本が対応づけられるものに関しては除外する。これによって、「小篆字形を見ながら対応する現代漢字を定める」作業は単純に対応づけられなかった 10 巻本の小篆のみに絞ることができる。これを前述の小篆検索ツールによって現代漢字に対応づけ、5 巻本との対応関係をとった。しかし、5 巻本の楷書が誤っている状況もしばしばあり、鈴木慎吾氏による切韻データベース(科研費課題番号 16K02671 の成果物である)によって補正することで処理した。

対応づける適切な現代漢字が無いものに関しては IDS 列あるいは異体情報を付記した実体参照文字列に対応づけることとした。

３．３．　『篆韻譜』『繫傳』対照表の作成

『篆韻譜』10 巻本・5 巻本対照表の作成に際して、全ての小篆に現代漢字または代替の実体参照シーケンスを割り当てた。対応する現代漢字を用いて、これと前述の大徐・小徐小篆対照表を連結することで対照表の概形を作る。対応不能字については 5 巻本と大徐・小徐本の全面的な比較分析を行った王筠『説文韻譜校』により検証する。

３．４．　『篆韻譜』『繫傳』の稀覯本のデジタル画像公開

清代の説文研究では広く用いられたものの、民國以降の影印出版の中では流通しなかった版本がいくつかあるため、それらの撮影とデジタル公開を進め、同時に対照表への組み込みを行う。以下のものがある。

- 大徐本: 平津館本(嘉慶初印本)
  平津館本は、段玉裁の『汲古閣説文訂』以降、續古逸叢書・四部叢刊による岩崎本の影印本の流通に至るまで、最も広く参照された宋刊小字本の翻刻である。これの様々な重刻があり、世界書局による光緒重刻本や、百部叢書に取り入れられた陶升甫本が広く流通しているが、周祖謨によればどれも初印本に比べ誤刻が多いという。初印本の影印出版が見当たらないが、国立公文書館に所蔵がある。
- 小徐本: 汪啓淑本
  汪啓淑本は清代に初めて翻刻された小徐本であり、清代の説文学が最も盛んであった時代、

これを参照していた研究が少なくない。しかし、より収字数も多く校訂が行き届いたと期待される祁寯藻本や、四部叢刊の中での述古堂本(明末清初の錢曾による景宋写本)の影印出版がされると急速に流通しなくなり、現在影印本などが出ていない。国立公文書館に所蔵がある。

- 『篆韻譜』：函海本
  王勝昌氏の「説文篆韻譜之源流及其音系研究」によれば王筠『韻譜校』は現在知られている 5 巻本の最古の版本である元刻本ではなく、清代の李調元による「函海」叢書に含まれるものを用いた。このことは、『韻譜校』が『篆韻譜』の小篆字形について指摘する際、その字形が元刊本に見えないことからも裏付けられる。しかし、『篆韻譜』函海本はかなり粗な翻刻であり、現在影印が流通していない。国立公文書館に所蔵がある。

４．研究成果

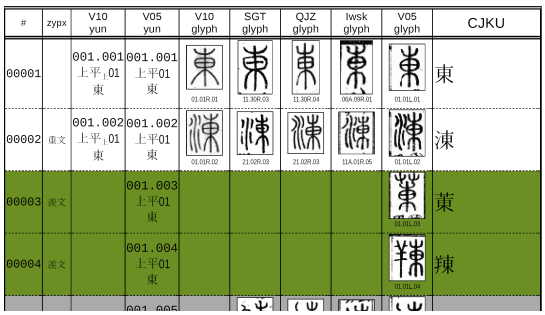
本課題で作成されたデータベース群と、それらに基づく学術的な知見に分けて報告する。

４．１．　データベース

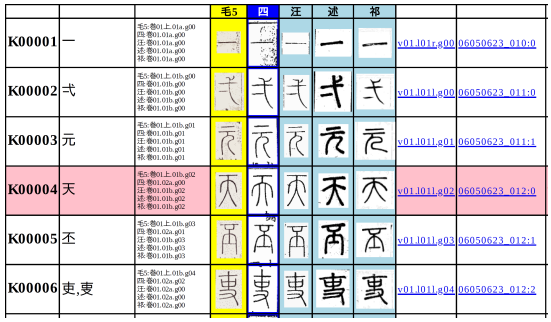
課題の目標であった『篆韻譜』『繫傳』諸本対照表として以下のものを完成し公開した。

[1] 『篆韻譜』『繫傳』対照表
『篆韻譜』10 巻本(馮桂芬本)、5 巻本(種善堂元刊本、徐之昌旧蔵・四部叢刊影印)、『繫傳』述古堂本(四部叢刊影印)、祁寯藻本(華文書局影印)、『説文解字』岩崎本(四部叢刊影印)の対応関係を行単位で整理し、出現箇所および対応現代漢字を付加した対照表を公開した。排列は 10 巻本の排列を基盤とする。

[2] 『繫傳』諸本対照表
『繫傳』四庫全書本、汪啓淑本(東北大学附属図書館所蔵本)、述古堂本、祁寯藻本、『説文解字』汲古閣本の対応関係を行単位で整理し、出現箇所および祁寯藻本・四庫全書本の掲出箇所へのハイパーリンクを含めた対照表を公開した。



『篆韻譜』『繫傳』対照表



『繫傳』諸本対照表

副次的な資料として以下のものを広島大学で公開した。

[3] 『説文解字』四庫全書薈要本・汲古閣本対照表
四庫全書はしばしば誤写や改変が疑われるため、その検証として四庫全書薈要が収める大徐本と、その底本である汲古閣通行本の小篆の比較表を作成した。この表から、説文の小篆字形に関しては、編纂中の誤写・改変が発生した可能性はそれほど高くないことが示された。

[4] 『説文解字』岩崎本影印対照表
岩崎本は「續古逸叢書」による影印と「四部叢刊」による影印がある(出版はどちらも商務印書館)が、續古逸叢書本、四部叢刊初印本、四部叢刊重印本のどれが加筆が少ないかという議論が戦前からあるが、第三者検証が可能な形での議論は行われていない。そこで、續古逸叢書本(江蘇広陵古籍出版社影印)と四部叢刊初印本の小篆を切り出して重ね合わせた比較画像群を作成し、単なる画像のコントラスト調整などに収まらないと思われるものについてはマイクロフイルムの紙焼きの状況も示した。

[5] 『説文解字繫傳』汪啓淑本影印データ

[6] 『説文解字』平津館本嘉慶初印本影印データ

[7] 『説文解字篆韻譜』函海本影印データ

また、以下のツール群に関しては gitlab.com にて公開している。

[8] 説文解字小篆検索ツール
本課題の事前準備として作成していたものだが、元来は現代漢字検索ツールとして作っていたもので内部構造が非常に複雑化していた。JavaScript の Worker Thread を使うように大幅に書き改めた。現時点では汲古閣 4 次様本、汲古閣通行本の字形の確認と、両汲古閣本、祁寯藻本(小学彙函本)、段注本の当該字掲出ページへのハイパーリンクを得る。

[9] 『説文解字五音韻譜』萬曆本・『説文解字』汲古閣本対照表(その他資料[9])
『篆韻譜』研究の難点の一つとして、韻書排列のデータと説文排列のデータの突き合わせの工数が多いことがあるが、おそらく同様の背景から元明代に広く用いられた『説文解字五音韻譜』の分析もあまり活発とは言い難い。少なくとも部首の(字音による)

排列が『集韻』に従うことは知られているが、各部首内の文字の排列を考える時に、その字音は大徐本が挙げるものに限定しているからである。『篆韻譜』対応表の経験を踏まえて作業効率化のツールを作成し、対照表を完成させた。

この他、原本を所蔵する他機関で公開されたものに以下のものがある。

[10]『説文真本』汲古閣四次様本の淮南書局翻刻本影印データ
京都大学人文科学研究所の東方学デジタル図書館にて公開。

[11]『仿宋藍本説文解字』日照丁氏翻刻本影印データ
京都大学人文科学研究所の東方学デジタル図書館にて公開。

４．２．　本課題によって新たに得られた知見

４．２．１．　『篆韻譜』について

第２年度に対照表[1]の骨格が完成し、以下のことが明らかとなった。

a) 旧説では 10 巻本には新修字はあっても新附字はないとされていたが、新附字が 3 字見つかった。
b) 小徐本に有るが 10 巻本に無い字は 118 字、小徐本に無いが 10 巻本にある字は 30 字であった。
    - したがって、脱落の規模は説文全体の 1%程度である。篆韻譜 10 巻本の脱落がランダムに生じたとすると、400 字近い新附字が殆ど無いことの説明は困難である。
c) 述古堂本・祁寯藻本で違いがある場合、多くは 10 巻本と述古堂本が符合する。10 巻本と述古堂本の違いは大半は異構関係(図形部品は同じだが、その偏旁冠脚の組み合わせが異なるもの)である。
d) 現行の 5 巻本は二徐で違いがあるものを全て大徐に寄せているとは限らない。10 巻本や小徐本のままで、大徐本と異なる場合もある。

工藤氏は、10 巻本と 5 巻本の脱落が符合している箇所の多さから、少なくとも現行の 5 巻本は、脱落がない 10 巻本に対して増補を行ったのではなく、現行の 10 巻本のような脱落を持った底本を増補したものである可能性が高いことを明らかにしている。このことや、徐鉉が李舟切韻によって増補したことを書く後序を含む『篆韻譜』が実物としては未発見であること、またさらに d)を考え合わせると、現行の 5 巻本は徐鉉自身が増補したものではなく、後人が大徐本を用いて増補したものである可能性も考えられる。

４．２．２．　『繫傳』四庫全書本について

第 2 年度に対照表[2]の骨格が完成し、さらに四庫全書本『繫傳』を加えた結果、以下のことがわかった。

当初の興味は、四庫全書本『繫傳』特有の小篆は『篆韻譜』とどの程度共通するかという問題であった。対照表[1]では、『篆韻譜』10 巻本が全く異なる字形を掲出する状況はそれほど多くなく、大半は述古堂本と同様であった。一方、四庫全書本『繫傳』の小篆は部品図形が全く異なるものや、部品数が異なるもの、さらには他の箇所で掲出する小篆と衝突するものなど、『篆韻譜』10 巻本とは異なる方向性のものが目立つ(雑誌論文[1])。

一般的には、汪啓淑本が四庫全書本の稿本を元にしていると考えられているため、四庫全書本特有の部分があったとしても、それは編纂時に発生したと改変あるいは誤写と扱われることが多い。これを検証するため、四庫全書薈要本の大徐本と、その底本である汲古閣通行本の小篆の全数比較を行ったが(対照表[3])、その結果、両本の字形差は非常に少ないことが判った。この結果を踏まえると、同一底本から作業を始めて四庫全書編纂の際に大きな差異が発生したとは考え難い。なぜなら、もし底本に意図的に改変を加えて「望ましい字形にした」結果が四庫全書本『繫傳』であるとすれば、大徐本でも同様の改変が加わる筈だからである。また、誤写によるとしても、なぜ大徐本と小徐本で誤写の比率が大きく違うのかの説明は容易でない。他本と異なる字形は底本の段階で存在したと考えるのが自然である。本課題期間中には調査しきれなかったが、本報告書執筆直前に文津閣本の影印本で予備的な調査を行う機会を得た。文淵閣本で他本と異なる箇所の多くは、文津閣本でも文淵閣本に似た状況であった。

すると、四庫全書本『繫傳』にのみ見える小篆は『篆韻譜』あるいはそれ以前の形を残すのかという点が問題となる。これについては、他の『繫傳』版本と四庫全書本だけが異なる部分を精査すると、『繫傳』が記す六書説と完全には整合しないものがしばしば見られる。その典型的なパターンは、部首Ａにおいて、正文を「従Ａ声Ｂ」と注した後、その重文が「或従Ｃ」などと注して示される状況で、大徐本や通行の小徐本では重文の字形が「Ｃ＋Ｂ」であるのに、四庫全書本は「Ａ＋Ｃ」の字形で示すというパターンである。たとえば、「貦」を四庫全書本は「瑀」のように書く。この項は「玩、弄也。從玉、元聲。五汗反。」の次に玩の或体として掲出されており、他本での説解は「玩或從貝。鍇曰、貝亦玩也。」である。四庫全書本では「玩或從具。鍇曰、具亦翫也。」となっており、「具」が部品として含まれることは説明できるけれども、「元」と差し替えることを説明できない。注意深く考えれば、このような「Ａ＋Ｃ」の字形は声符を欠くこととなり、説解が字形をうまく説明できなくなっている。校訂者が小篆の知識がないとしても、他本の字形を見た上でより正しいと思われるものを選んだのであれば、四庫全書本の字形が適切だと判断するとは考えにくい。従って、仮に他本を参照しながら校訂していたとしても、「正しい小篆字形に寄せる」という考え方で修正を加えたとすると結果を説明できない。

また、伝統的な四庫全書本『繫傳』の稿本が汪啓淑本の底本であるという理解の見直しが必要となるが、これに関しては董婧宸氏が興味深い説を提出した。汪啓淑本の「聖朝文治光昭館開四庫，淑得與諸賢士大夫游獲見繫傳稿本。愛而欲廣其傳因合舊鈔數本校錄付梓，其相沿傳寫既久無善本可稽，不敢以臆改也。」の「聖朝文治光昭館開四庫，淑得與諸賢士大夫游獲見繫傳稿本」を、四庫で繫傳稿本を獲たと読むのではなく、諸賢士大夫から繫傳稿本を獲たと読むべきで、実際に台湾に残存する校本と符合するという指摘である。本課題と独立に為され、また方法論も異なる研究からのこの指摘が、本課題の結果とよく符合することから、ある程度妥当な結論と言えるだろう。

４．２．３．　『説文解字』岩崎本について

対照表[1]では『篆韻譜』10 巻本と比較する大徐本字形として、岩崎本(續古逸叢書影印)を示したが､上で述べたように續古逸叢書･四部叢刊の影印の加筆状況については様々な立場がある。この問題はもともと中国や台湾ではあまり意識されていないが、中華再造善本により海源閣旧蔵本の加筆が少ない影印が出版されたことから、今後、中国や台湾で検討される可能性は低まっていると思われる。そこで、續古逸叢書・四部叢刊初印本の見出し小篆を重ね合わせた画像を作り、(小篆字形に限定されるが)加筆状況を議論した(講演[1]、その他資料[4])。その結果、四部叢刊初印本のほうが疑問のある字形が多く、「(十分な先行研究がある状態では)加筆することによって悪化することはない」と考えるのであれば、倉田淳之助が言うように四部叢刊初印本のほうが加筆が少ないと言える。ただし、北宋代の大徐本原本の字形が岩崎本の字形に近かった筈とは言い難く、大徐本一般の字形としては續古逸叢書を参照するほうが混乱が少ないように思われる。

４．２．４．　『説文解字』藤花榭本について

汲古閣通行本に対して段玉裁の『汲古閣説文訂』による批判が出された後、より宋本に近い翻刻本として藤花榭本や平津館本が出版されたが、それらの清刊本の評価は必ずしも安定していない。平津館本は底本が明らかにされておらず、後に岩崎本の影印が流通するようになると岩崎本をもとに妄改したものだという批判が為された。しかし、周祖謨や倉田淳之助のように、平津館本は『説文訂』が引く周氏宋本(今に伝わらない)と符合することから、別の底本があるために岩崎本と異なるという見方もある。一方、藤花榭本は序文が記す底本の由来が岩崎本とは別であるため、岩崎本との違いは余り問題にされていない。しかし、従来藤花榭本の底本とされてきた海源閣旧蔵本を詳細に比較すると藤花榭本と異なる、という指摘が王貴元氏によって提出された。王貴元氏は藤花榭本の底本は海源閣本ではないという見地をとった。
この問題について、厳可均『説文校議』に基づいて小篆字形の差異を調べてみると、しばしば『校議』が引く宋本・岩崎本・平津館本の状況が一致しているのに藤花榭本だけが異なっており､その場合の藤花榭本の字形は汲古閣本と全て合致しているという結果を得た(雑誌論文[3])。このことから、藤花榭本は海源閣本を底本としている可能性は棄却しきれないが、しかし汲古閣本によって改変を加えているため違いが発生した可能性が高い。この問題に関しても、董婧宸氏による独立の研究があり、関係者の事跡を追跡した結果、藤花榭本は汲古閣本によって改めていると論じている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 9 件）

[1] 鈴木俊哉:「四庫全書本『説文解字繫傳』に見える小篆異体字」, 環境科学研究 (13), p.65-95 (査読有), 2018-12.
[2] 鈴木俊哉: 「『説文解字繫傳』汪啓淑本の底本推定のための版本比較ツール」, 人文科学とコンピュータシンポジウム論文集, 2018(1), p.67-74 (査読有), 2018-12.
[3] 鈴木俊哉: 「『説文校議』に見える「宋本」と平津館本の関係について」, 環境科学研究 (12), p.11-35 (査読有), 2017-12.
[4] 鈴木俊哉: 「清代説文校勘の「宋本」言及箇所のデータベース化」, 情処研報, DC106 (2), p.1-6 (査読無), 2017-10.
[5] 鈴木俊哉: 「説文解字書影対比をテンプレートマッチで行う際のパラメータ自動設定について」, 情処研報, CH115(3), p.1-6 (査読無), 2017-07.
[6] 鈴木俊哉: 「説文解字篆韻譜に見える説文解字繫傳 25 巻所収文字の状況」, 情処研報, CH113 (2), p.1-8 (査読無), 2017-01.
[7] 鈴木俊哉: 「新刊大徐本説文解字の版本評価の再検討に向けて」, 環境科学研究 (11), p.77-100 (査読有), 2016-12.
[8] 鈴木俊哉、鈴木敦、菅谷克行: 「『説文解字』小徐本の版本比較における字形差判断基準の調査」, FIT2016 講演論文集 第 4 分冊, p.15-22 (査読有), 2016-09-07.
[9] 鈴木俊哉: 「説文小篆の符号化計画に対する Variation Selector 提案とその反応」, 信学技報 116 (138), p.29-34 (査読無), 2016-07-15

〔学会発表〕（計 3 件）
[1] 鈴木俊哉: 「テンプレートマッチを用いた岩崎本説文解字影印本の加筆部分推定」, 東洋学へのコンピュータ利用第 30 回研究セミナー, p.231-285 (招待有)
[2] 鈴木俊哉: 「『説文解字篆韻譜』と『説文解字繫傳』収字対応調査」, 東洋学へのコンピュータ利用第 29 回研究セミナー, p.43-275, 2018-03 (招待有)
[3] 鈴木俊哉: 「『説文解字篆韻譜』の重出・類形異字と王筠『説文韻譜校』」, 東洋学へのコンピュータ利用第 28 回研究セミナー, p.367-449, 2017-03 (招待有)

〔図書〕（計 0 件）
古籍の影印データの公開については「その他」に示した。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
ホームページ等
公開したデータベースおよび資料は以下の通りである。IIIF 形式の画像提供サーバは現在代表者の所属部署で稼働しているが、今後移管する可能性もあるため、manifest ファイルの URL だけは維持できるよう manifest ファイルを gitlab に配置した(本報告書執筆時点では CORS 設定の問題はない筈であるが、IIIF の画像取得プロトコルが https 未対応なので注意されたい)。
[1] 『篆韻譜』『繫傳』対照表
- PDF 形式: http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047569

[2] 『繫傳』諸本対照表
- PDF 形式: http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046567

[3] 『説文解字』四庫全書薈要本・汲古閣本対照表
- git リポジトリ: https://gitlab.com/mpsuzuki/mkHtml.rb/tree/swjz-wyyp

[4] 『説文解字』岩崎本影印対照表
- PDF 形式: http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046886

[5] 『説文解字繫傳』汪啓淑本影印データ
- PDF 形式: http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046566
- IIIF 形式: https://mpsuzuki.gitlab.io/iiif-manifest/SWJZ-XZ-WQS/manifest.json

[6] 『説文解字』平津館本嘉慶初印本影印データ
- PDF 形式: http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046567
- IIIF 形式: https://mpsuzuki.gitlab.io/iiif-manifest/SWJZ-PJG/manifest.json

[7] 『説文解字篆韻譜』函海本影印データ
- IIIF 形式: https://mpsuzuki.gitlab.io/iiif-manifest/SWZYPv05-HH/manifest.json

[8] 説文解字小篆検索ツール
- git リポジトリ: https://gitlab.com/mpsuzuki/parseIDS.html/tree/webworker

[9] 『説文解字五音韻譜』萬曆本・『説文解字』汲古閣本対照表
- git リポジトリ: https://gitlab.com/mpsuzuki/mkHtml.rb/tree/swjz-wyyp

[10] 『説文解字繫傳』小学彙函本影印データ
- IIIF 形式: https://mpsuzuki.gitlab.io/iiif-manifest/SWJZ-XZ-QJZ_HU/manifest.json

６．研究組織
(1) 研究分担者
該当なし
(2) 研究協力者
研究協力者氏名: 鈴木敦
ローマ字氏名: (SUZUKI, atsushi)

研究協力者氏名: 菅谷克行
ローマ字氏名: (SUGAYA, katsuyuki)